

令和6年度 文京区障害者地域自立支援協議会
第4回子ども支援専門部会 要点記録

日時 令和6年12月2日（月）午後1時02分から午後3時09分まで

場所 文京シビックセンター4階 シルバーセンター会議室B

<会議次第>

1 開会

2 議題

(1) 令和6年度子ども支援専門部会振り返り

(2) ケース検討会の実施について

(3) 全体会の発表について

3 その他

<出席者>

向井 崇 部会長、勝間田 万喜 副部会長、高山 直樹 部会員、荻野 美佐子 部会員、
高山 陽介 部会員、内田 千皓 部会員、町田 寛子 部会員、川崎 洋子 部会員、加藤 たか子
部会員、井上 アヤ乃 部会員、小野寺 素子 部会員

<欠席者>

内海 裕美 部会員、鵜沼 苗子 部会員、高橋 拓也 部会員

<傍聴者>

2名

1 開会

本日の予定の説明等

2 議題

(1) 令和6年度子ども支援専門部会振り返り

資料第1号について、向井部会長から説明

- ・研修会は、福祉関係者と学校関係者と地域の方々、広く集まることができ、大きな取組だった。学校の先生方は本当に忙しく、大変な学校現場の状況で、子ども、ご家族と関わりながら状況を把握している部分と、なかなか普段関わりが少ない部分があったと思うので、いろいろな方と関わって情報を得て、考えを深めるきっかけになった。来年度に向けても、目標を明確にして、行っていけるとよい。
- ・その部門について詳しい職員もいれば、全く分からない、そういう子どもと関わったときに初めて知るといようなケースワーカーもあり、研修会に多くの職員が参加して、交流を図れればと思う。他でもいろいろなところで関係の集まりや研修を実施しているので、顔が見える形を作っていきたい。
- ・もともと要所にいる方が、子どもを切り口に集まることはなかったので、よい機会を与えていただいた。医療と保健と福祉という分野の中で、どう困り事を見立てていくかが、とても難しい世界で支援をしていく必要がある。皆様の強みも教えていただいて、その先にどうつないでいったらいいのか、改めて役割を明確にしていこうと思う会議だった。
- ・普段、対応している子どもの年齢、分野は限られているが、子どもに関しての心配事や、家庭が抱えている負担を、相談いただいたら、あるいは必要に応じて可能な範囲で情報提供し、他につなぐ中で、バトンタッチするタイミングや、つなぎ先に迷うところが切れ目にならないようにするにはいけない。多岐にわたる支援や、協力できる団体、組織があるということでは、仕組みの部分とソフト的な顔の見える関係、自身で問い合わせるハードルを下げながら、時間を置かずに適切なところにつなぎ、紹介できたらと思っている。
- ・子どもが変わると、保護者も変わらなと思っている、子どもをまず、いい方向に導くと保護者の変容も見られるというところで、特別支援学校・小学校・中学校は重要な役割を担っている。一方で、つなぎ目としては弱い。計画相談事業所や、子ども家庭支援センター、児相が、つなぎのパイプ役としては大きく重要。
- ・子どもの1年はすごく深刻で、保護者も心配になっているが、長い目で見ると、成長しかな

い。わらにもすぎる思いでいろんなところに相談に来られるが、我々支援者から見ると、そこまで深刻でないケースも結構多い。抱え込まずに、一緒に悩めるパートナーは大事という意味では、キーパーソンづくりや、顔の見える関係性づくりという、今回の研修会は役割が大きかった。地域のために活動している支援者がつながっていないパターンもあり、研修会とかで共有できるのも一つの大事な場。1回で完結せず、その後につながる仕組みもつくれたら、研修会としても意義がある。

- ・今、文京区に教育センターの事業所連絡会が年に1回あり、文京区障害児ネットワークがあり、文社協の円卓会議がある。それとは別に、区独自の研修があり、都の研修もある中で、自立支援協議会の子ども支援専門部会として、何の研修をやり、親会にどう提言していくのかを考えた上で、来年度のケース検討会を考えていったらいい。

教育センターの事業所連絡会と障害児ネットワークと、やっていることが被っている。同じようなことをあちこちでやるよりも、目的が明確化されたほうがいい。

- ・最初の乳幼児検診で、地域の子どもたちや保護者の支援も見ていくが、その後、文京区にはいろいろな福祉の場があって、支援が必要な人たちはつながっていき、全体として機能していると思いつつ、就学前の場に関して、子どもたちが行っているのが、ほとんど民間で、民間の事業所にはいろいろあって、どう連携を取るのか、情報共有をどこまでやっていいのかがよく分からない。

就学前にリスクがありそうだが、私立の場に行った子どもは、その後どうつながっているのかよく分からないところもあり、成人期になって福祉の対象になったときに、民間の場をどう巻き込んでいけるのか。どこかで接点があれば、つながっていくし、顔の見える関係がネットワークとして増えていけばいい。

- ・なぜ切れ目はあるのかを掘り下げるということで、まだ議論しきれていないが、縦割りだからというのが分かっている。

縦の切れ目は縦割りで、縦の間に、横の切れ目がある。ネットワークは属人的にはできているかもしれないが、切れ目ごとに引継ぎ、情報共有とか簡単なレベルではなく、きちんとした横のネットワークで、人がつながっていくことが大切。

切れ目に関しての肝になるのが、子どもからの計画相談。総合的に把握できるアセスメントが必要で、予算を立てて、増やす努力をしなきゃいけない。

事例検討会をやるとか、子どもを真ん中に置いて集めようとする人が必要。

- ・教育センターのそよかぜは相談支援が絶対入るが、民間の事業所に通っている子は、セルフ

プランがほとんど。同じ子どもなのに、サービスが受けられないという現実が顕著にあって、優先的に相談支援を区が入って家族支援やトータルの支援が必要な人もいっぱいいる。就学相談資料は教育センターより民間の事業所に多く通っていても、教育センターが書く。それは情報として子ども中心なのか。

- ・3歳の検診までに何らかの発達がゆっくりな子どもがいたときは、教育センターから支援につながるパターンが多い。検診以外の場所でも、子どもの発達が心配というのは、幼稚園や保育園から上がっていくパターンと、親自身がアクセスを取っている方が多い。

サービスはここで受けると下話をつけて、あとは申請をして、使えるようにしたいという入り口の方が多く、計画相談があるが、このサービスが使いたいからいらないという方が大勢いる。小さい子どもについて言えば、計画相談が空いているか相談しても、受けてくださる事業者が非常に少ない。介護保険でもそういう仕組みになっているが、基本的には全部、ケアマネをつけることで制度が始まっている。障害は、後から事業者が出てくる流れがあるので、制度のつくりの課題。結果、教育センターから行った人だけがたくさんついているというわけではなく、仕組みの課題がある。

- ・セルフプランだと事業所が動くことになる。民間のキーパーソンとなっているから、セルフプランでいろんなところにつないで、トータルの生活を見ている状態。
- ・児童に関して、長く関わっていけるところではよいが、そのときの課題はなかなか引き出すことが難しいというのが現状。

サービスを使うために相談支援がないと駄目と言われたから、お願いしますみたいなケースも、児童の場合は多く、どこに通院しているかも、学校も言いたくない人も中にはいる。

- ・切れ目の問題で、ここが切れ目だよ、で終わらないようにするにはどうしたらいいかが、制度上のことだと、スピーディーに動かない。今まで、業務の中でなあなあになっていた部分は反省して、一人一人をしっかりと見ていきたい。そこのサポートを、区とか皆さんにお願いできるとよい地域の福祉になる。

(2) ケース検討会の実施について

向井部会長から説明

- ・ゴールを7月の研修会の事例検討会のためとしなくても、クローズの場で課題を出して、専門部会としての会議の中で内容の深掘りをしていくことで、地域課題が出て、じゃあ、この事例はどうやって加工していこうかというのがいい。
- ・事例を確保して、どう発信していくか。相談が全部網かけられない形になっているから、ど

うしたらいいのかという体制や、制度の問題を明らかにしていく。

- ・うまく回っている事例があればそういう事例とか、逆にそこを突破するのに、今、それぞれが限界を感じているとすれば、それをどうしたらいいかを検討できると、共有から一歩進んだ突破の入り口に立てる。事例が思い当たらないのであれば、それを深めるような何かがあったらいい。大人になる前に子どもたちをどう救うのか、環境や支援のスタッフや、そういうところをつなぐということなのか、そもそもどうそれを捉えていくのかに、共通の理解があると、お互いに何を考えながらつないでいったらいいかが可視化できる。糸口が特性か、環境か、疾病か、どこなのか、それぞれの分野で、得意とされるものが違うところで、強みを共有できることが、全体にも還元できる。
- ・子どもは今、何に困っているのかとか、どうしたいのかを保護者に投げかけていくことによって、本人中心に考えることを、保護者が気づいていくスタンスが、文京区の中で子どもでも大人でも、本人の意思決定支援ということのスタンスの理解というところが、共通してあるかどうか。保護者の気持ちが強い方が多いから、それに対しても、子どもは、当事者はどうなのかリアクションを返せるかというスタンスが共通で持っているか。
- ・子どものアセスメントもちろん大事だが、もともとの環境のアセスメントができなくなっている。保護者が、先生に見せる顔と、療育に見せる顔と、行政に見せる顔が違うような気がするというところから、家族の強みを含めて考えていくチームがないと。
- ・子ども中心の難しさは、基本的に保護者が相談するので、横の切れ目になった感じ。今、文京区としての文化は、子どもに寄り添って、お母さんにも寄り添いながら、導いていく。
- ・これまでも保護者の相談は大きなテーマだったので、保護者も一緒に巻き込んで考えるのも大事だし、現状、保護者に投げかけると、じゃあ、私いいですと引いちゃう人や、相談に来なくなって、自分で探しちゃう人もいる。保護者自身も成長されているので、経験を聞くのは、すごく大事。
- ・こぼれてしまったケースで、あのときこうすればこぼれなかったということは、既に分かっている。保護者に、どう関わっていったら、うちの子はちょっと気をつけないといけなとか、ちゃんとつながっていくために、こういう行動を取ったらいいのかとか、行動変容を促せる関わり方が、他機関でできたかとか。そうすると、他の機関からこういう押し返しをしていたということを共有して、うまくいったケースとうまくいかなかったケースがあるかもしれないが、それは切れ目というか、人がやっていることではなくて、保護者の障害の需要であるとか、ある程度は分かっている、違うことがあれば、それが分かるような事例

ができれば、見え方が変わって、今後につながる。連携するときにお困りだったものの、課題が明確になっているのであれば、その先のところをやったらい。

- ・教育や福祉を、情報共有みたいなチームにする。あるいは、見守り程度のところだけの人がいるとか。事後的じゃなくて、予防的、事前的なものを用意しておく。何かあったときには出るような形。

子どもの成長や、発達において、新しい問題が家族の中で生まれ、変化していくと、一つのところでは無理になる

- ・文京区も、母子保健の分野と児童福祉の分野で一体的にゼロ歳から支援する、こども家庭センターを設置し、予防的に入っていく支援については、検討していくことになる。

今の時点で、保健サービスセンターは4歳まではカバーしているが、大体2割、3割くらいは何らかの支援が必要というアセスメントをしている。親が初めて子育てをするので、何か分からないというものも含めた支援。その中にハイリスクがあるので、虐待予防のところで、区で幅広く取っていけば、子どものネットワークが、来年以降できると思っている。

- ・共有できる確信が持てる場所とは、それなりに共有していけるけど、それが、確信が持てないところでは、共有できないみたいなことが裏側にある。現場の中で、このケースどうしようと思っているときに、ほかのどこかにつないで、違う見え方や解決方法があるとかの情報 that 得られればいい。

子どもたちの意思決定がゴールだが、意思決定するためには、選択肢として何があるのかが分からないと何も見えてこない。システムとしてそれができれば一番いいが、なかなか難しいので、取りあえずできるところから、幾つかの不安の中から、困っているところを出していただくのがいい。

- ・基本的に、うまくいったケースも困難ケースも、結論、人。困難ケースは逆に言えば、なかなか学校との連携が取れないとか、福祉側との温度感があってうまく回らないので、分岐になるところに、焦点を当ててもいい。

以上